悠々オーストラリア
～メルボルン子育て日記～
10

親と先生が手を取りあって

良い学校づくりのために

メルボルンの公立小学校では、ボランティアの保護者の姿をよく見かけます。教室に担任が1人、手伝いの親が3人ということもあります。本読みや算数の活動などを手伝います。

娘が小学校1年生の時、学期の始めに授業の手伝いのお知らせがきました。下の娘がまだ4歳だったので私にもできるかと迷いましたが、とりあえず、次女の手を引いて参加することにしました。オーストラリアでは、幼い子どもがいるお母さんが子連れで活動することもめずらしくありません。

1学期に2、3回行われる制服の販売や、カンティーン（Canteen）と呼ばれる売店で手伝いをするのもお母さんたちです。売店では、休み時間におやつを販売するほか、注文を受けた子どものランチの冷凍食品を温めたり、サラダやサンドイッチを作ったりと大忙しです。

学校の手伝いというと大変な仕事を想像しますが、気負わずに参加している印象を受けます。ちょっとした時間があれば、気軽に学校に来て手伝うという姿勢です。それに、担任はもちろん、校長先生とも下の名前で呼び合う文化で、先生と親との距離が近いのも、気軽に学校に来られる一つの理由かもしれません。朝、子どもを学校に送り出したらもう親の務めは終わりというのではなく、親が先生と共に手を取り合って、より良い学校にしていこうとしているようです。

協力し合っている親と先生ですが、親と先生の役割は区別しているように感じます。学校での親の役割は先生たちのサポートですから、学習活動の一部や行事を手助けしますが、それ以上は介入しません。そして、家庭での親の重要な役割の一つがしつけであると強く認識しています。

こちらでは、ペアレンティング（Parenting）という言葉がよく聞かれます。「親業」とでも言いましょうか、育児から行儀や作法のしつけ、人格面での教育に至るまでの広い意味を含みます。娘の学校でも、保護者を対象にペアレンティングの講座を開き、親がしつけについて学ぶ機会を与えています。私たち親は、子どもの教育を学校任せにしないで、「親業」にしっかり取り組まなければいけませんね。

（新山直子、メルボルン在住）

（日曜日に掲載）

学校の売店を手伝うお母さんたち